

提 言

小児の肥満に及ぼすコロナ禍の影響

The Impact of COVID-19 on Childhood Obesity

杉原茂孝 (和洋女子大学大学院総合生活研究科 / 東京女子医科大学)

2020年3月に始まった新型コロナウイルスのパンデミックによって、わが国でも繰り返し緊急事態宣言が出され、不要不急の外出自粛、ステイホーム、三密の回避が叫ばれてきた。学校や幼稚園・保育所においても多くのスポーツ関連を含む行事が中止となり、遠隔授業も取り入れられている。

このコロナ禍の中で、日本では約4割の人が体重増加した、という報道もある。コロナ太りには、外出が減ったことによる運動不足、食べ過ぎや飲み過ぎによる摂取カロリー過多など、いろいろな要因が関連しているが、肥満が増えると生活習慣病のリスクが高まる。

Pietrobelliらによるイタリアにおける41人の肥満小児の研究では、3週間のロックダウンで、野菜摂取量に変化がみられなかったが、果物、ポテトチップス、赤身肉、砂糖を含む飲み物の摂取が増加し、スポーツ活動の時間が1週間当たり2時間半減少し、反対に睡眠時間が0.65時間/日増加し、最も衝撃的なこととして、スクリーンタイム (TVやゲームの時間) が4.85時間/日増加した¹⁾。

Brooksらは、米国Optum® COVID-19 Electronic Health Recordのデータを用いて、2020年と2017~2019年の6~17歳の全米のWCCs (well child checks: 健診) での年齢と性別で補正したBMIの変化量 (Δ BMIadj) を比較した。2020年9~12月の Δ BMIadjは $0.62\text{kg}/\text{m}^2$ で、パンデミック前2017~2019年の $0.31\text{kg}/\text{m}^2$ の倍であった。 Δ BMIadj増加は、肥満傾向の増加を意味するが、8~12歳児で最も高く、すでに肥満の児では $1.16\text{kg}/\text{m}^2$ とさらに高く、ヒスパニックで高く、男子の方が女子より高かった²⁾。

日本人小児の肥満頻度の変化を学校保健統計から見ると、2006年以降男子、女子とも肥満度20%以上の肥満傾向児は減少していた。しかし、2018年に比し、2020年の肥満度20%以上の頻度が、男子では、5歳、11歳、14歳、17歳でそれぞれ1.07%、3.30%、2.58%、2.00%増加し、女子では、17歳を除き、5歳、11歳、14歳でそれぞれ0.66%、0.57%、1.07%増加している。この小児肥満の増加がコロナ禍による生活習慣の変化によるものと断定はできないが、関連があると推測される。

全国各地で地域医師会と教育委員会等の協力のもと、小中学生を対象に小児生活習慣病健診が行われているが、コロナ禍で中止を余儀なくされているところもある。現在、日本肥満学会を中心に小児肥満症診療ガイドライン2022の改訂作業が進行中である。コロナ禍の今、そしてアフターコロナに際し、小児の肥満、肥満症への対策について、小児保健関係者の皆様のご尽力をお願いしたい。



文 献

- 1) Pietrobelli A, Pecoraro L, Ferruzzi A, et al. Effects of COVID-19 lockdown on lifestyle behaviors in children with obesity living in Verona, Italy : a longitudinal study. *Obesity* 2020 ; 28 : 1382-1385.
- 2) Brooks CG, Spencer JR, Sprafka JM, et al. Pediatric BMI changes during COVID-19 pandemic : an electronic health record-based retrospective cohort study. *EClinicalMedicine* 2021 ; 38, 101026.